

<もっと知りたい薬の話>

4 漢方のはなし 3 (血(けつ)の異常)

布団に入ると背中がかゆい、太股がかゆいなどというテレビコマーシャルを目にします。これは乾燥肌によるかゆみで、保湿成分や尿素の入ったクリームなどを使うとよいと宣伝されています。

漢方ではこの症状を血虚(けっきょ)もしくは陰虚と判断します。今回はこの「血(けつ)」の異常についてお話したいと思います。

【血とは】

血とは栄養素を含んだもので、全身の各器官に栄養と滋潤を与えるのです。

脾胃の運化作用によって食物から作られ、肝に貯蔵されます。そして脈管を通り全身へめぐり、各臓器や筋肉を活動させるのです。

血の異常は不足による血虚、滞ることによるお血、熱が入った血熱、冷えが入った血寒とがあります。

さて、冒頭で話した肌のかゆみが何故血虚なのでしょう。血の不足により肌への栄養分と潤いが足らなくなった状態による肌の乾燥なのです。そこで血を補う補血剤を用いて治療します。

<血虚証>

血の不足によって現れる症状です。労働過多や運動過多、勉強のしすぎ、手術や出産などの大量出血、妊娠、授乳により起こりやすくなります。また、脾虚の場合は食物からうまく血を作り出せず血虚となり、肝気虚の場合は貯蔵タンクが弱いため全身に血を流せずに血虚となります。使いすぎ、作れない、与えられない、この3つが血虚の原因なのです。

症状

倦怠感、めまい、筋肉のしびれ、顔面蒼白、痩せてくる、皮膚の乾燥、口唇の荒れ、ドライアイ、かゆみ、便秘、口乾、不安、不眠、健忘症、多夢、情緒不安定、月経不順、無月経、不妊症、無精子症。

さて、血の不足から生じる病態「血虚」についてお話しましたが、次は血の停滞によって起こるお血について話します。

<お血証>

お血証は血が停滞したことで現れます。特徴は刺されるような痛み(刺痛)、固定痛、顔色・皮膚の黒ずみなどである。お血は外傷、打撲などで起こりますが、気虚、気滞、血虚などでも起こります。

症状

刺されるような痛み(刺痛)あるいは絞られるような痛み(絞痛)、押すと嫌がる(拒安(きょあん))、固定痛、痛みは夜間悪化。顔色(特に目のまわり)の黒ずみ、口唇が暗紫色、皮膚の色素沈着が多い。月経痛、経血の色は暗紫色で血塊を伴う。

お血の一番簡単な例は打撲による「あざ」です。激しく痛み、押されることを嫌がり、皮膚に黒ずみ（あざ）ができる。血の停滞は血を動かすことにより治療しますが、血は自ら動けないので気とともにめぐらせるために、殆どの?血の方剤には理気薬（気をめぐらせる薬）が入ってます。漢方では痛みを瀉すといい、下痢させることにより痛みを治療することがあります。打撲直後の鬱血を取る有名な方剤も、大黄と芒硝(ぼうしょう)の瀉下作用により下痢をしますが、便が出るたびに痛みが消えると言われます。例は違いますが子供の熱が便が出るとともに下がるのも、熱を瀉したためと思われます。痛む場所により方剤を組み合わせると、より効かせられるようになります。